

金剛峯寺遺跡発掘調査概報

—高野山文化財防災施設貯水槽新設工事に伴う—

1992

財団法人 和歌山県文化財センター

例 言

- 1 本書は高野山防災施設貯水槽新設工事に伴う金剛峯寺遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は財団法人高野山文化財保存会の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
- 3 調査面積は約120㎡で、調査は平成4年6月1日から始まり、平成4年9月30日に終了した。
- 4 発掘調査は文化財センター主査富加見泰彦が担当し、本書の作成、編集は富加見が行った。

目 次

1 位置と環境	1
2 調査の成果	2
3 まとめ	4

挿 図 図版目次

第1図 遺跡の位置	1	図版1 調査地点と観音堂	5
第2図 調査地点	1	調査区全景	
第3図 木組柵	2	図版2 水利施設	6
第4図 調査区全体図	3	木組柵	
第5図 金剛峯寺遺跡出土遺物	4	図版3 出土遺物（中世）	7
		出土遺物（近世）	

第 I 章 位置と環境

高野山は、標高1000m前後の山々に囲まれた山上盆地で、東西約5 kmの平地と南北に延びるいくつかの谷状の地形によって形成されている。夏は涼しく、冬期は厳寒の地であり温暖な気候である和歌山のなかでは、やや異質な風情を持つ所である。

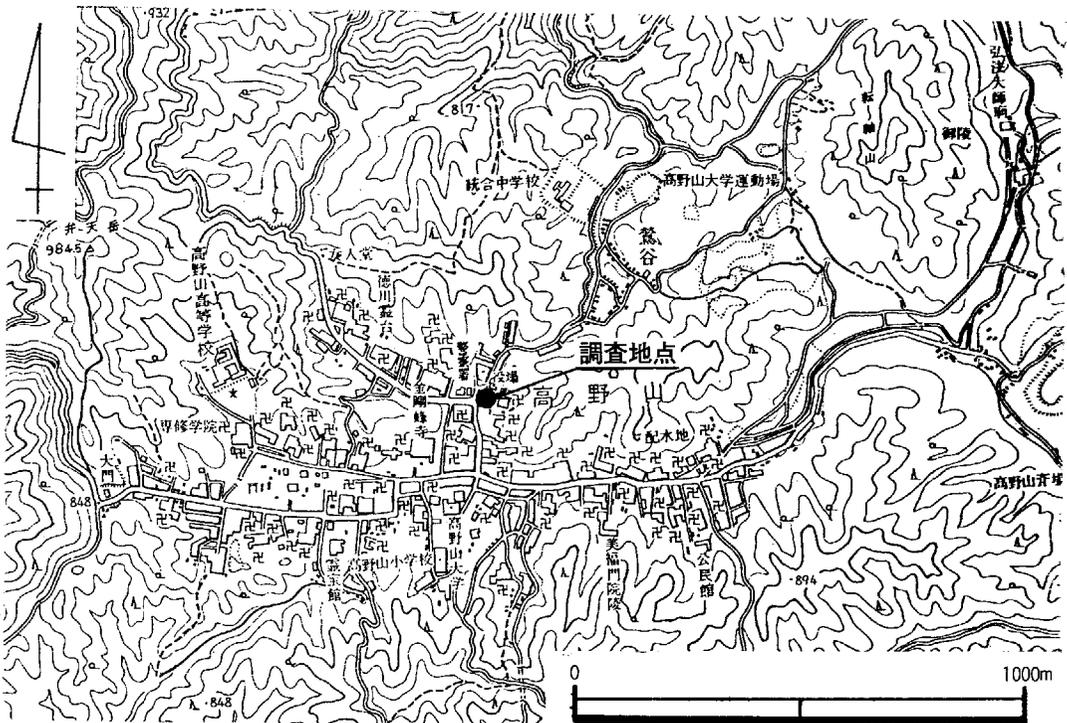
空海（弘法大師）がこの地に弘仁2年（816）に金剛峯寺を開基して以来、真言密教の聖地として今日にいたっている。

高野山では比較的古くから経塚を対象とした宗教遺跡などの調査は行なわれていたが、昭和56年の教化研修道場の建設にともなう発掘調査を契機として、塔頭寺院を対象として調査するようになった。

今回調査した地点は、高野山621番地で観音堂の境内にあたる。



第 1 図 遺跡の位置

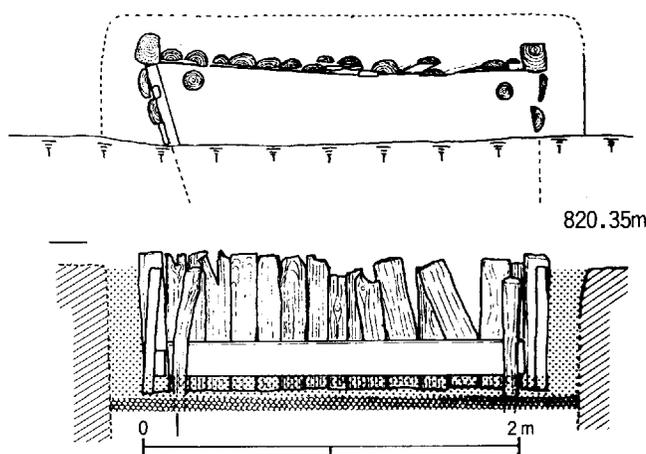


第 2 図 金剛峯寺遺跡調査地点

第II章 調査の成果

層序 江戸時代と見られる遺構面の上には約10cm程のN6 / (灰)粗砂の遺物包含層が存在する。その後、数回の整地が行われ現在に至っている。現地表面から約30cm下層に2.5 YR5/6 (明赤褐) 砂礫の焼土層の整地土が見られる。仮に明治21年の大火後の整地とすれば鍵層となる。

土層の観察から、現在は埋められているがこの焼土層以後溜池状の施設が設けられていたことも判明している。この施設については、地山を深く掘込んでおり、埋土は脆弱で危険なため底を確認するにはいたっていない。



第3図 木組樹

たことも判明している。この施設については、地山を深く掘込んでおり、埋土は脆弱で危険なため底を確認するにはいたっていない。

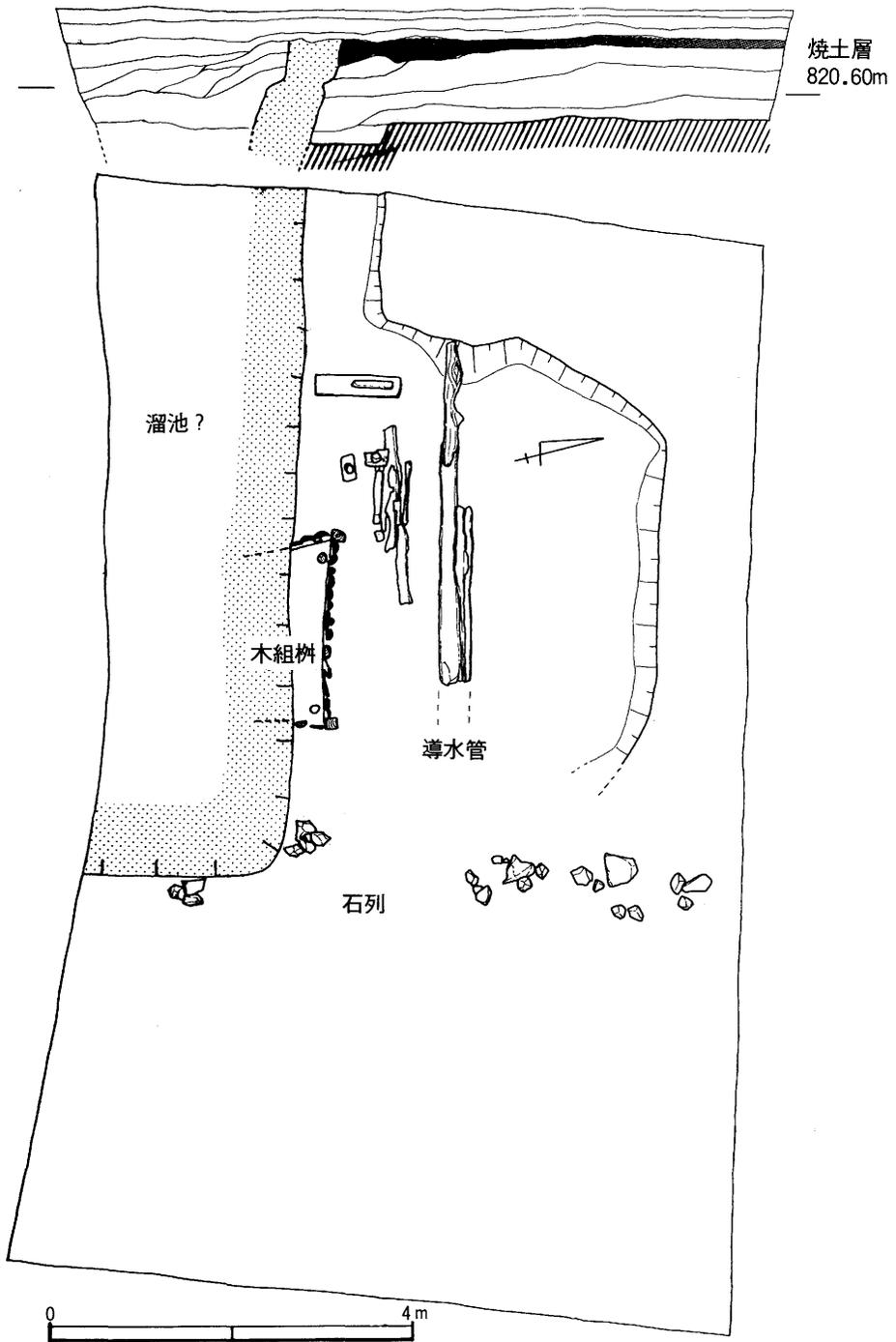
遺構 竹製の導水管と板材を組み合わせた導水管、木組樹などの水利施設、および地境を示すとみられる南北方向の石列とその上を覆う炭を検出した。

竹製の導水管 南北方向に延びる導水管で、水利施設との関連については不明である。木製のジョイントについては何点か出土している。中には、「東」と刻まれたものもある。

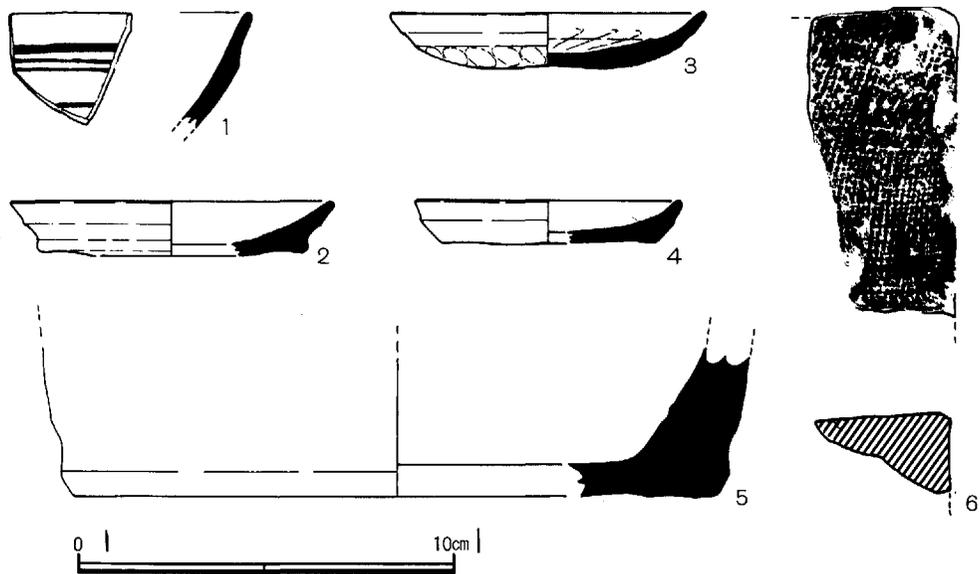
導水管 東西に延びる導水管で、途中で途切れているものの本来は10m以上あったと考えられる。残り具合の良い個所でみると断面「口」の字形に板材を組み合わせて管としていくことがわかる。

木組樹 南北辺の内法で1.0mの樹である。樹は地山を掘り窪め、四隅に角材を配し（現存2箇所）、その間は丸太を半截した幅10乃至15cmの板材を並べ、横方向は栈木で止めている。樹の深さは、0.64mで、底板は認められない。板材の裏ごめと樹の底には粘土を充填し、水漏れを防ぐ処置が行なわれているため水利に関係する樹であると考えられる。導水管とは並行する位置にあるが、両者の関連については現調査では確認できていない。

石列 不揃いながらも南北方向に点在する石は、その上面を厚い炭層が覆っていることから隣地との地境を示すものと考えられる。



第4図 調査区全体図



第5図 金剛峯寺遺跡出土遺物（中世）

遺物 主に19世紀代の陶磁器が遺物包含層から出土している。磁器は伊万里系の遺物が多くみられる。導水管の下層の整地土からは、14世紀代の瓦器、土師器の小皿や丹波あるいは常滑と見られる壺の破片が出土している。須恵質の平瓦も出土している。

まとめ 江戸時代の水利に関する遺構を検出した。江戸時代承応2年（1653）の古絵図には「湯屋」、元禄6年（1693）の絵図では「浴室屋敷」と、水に関係すると見られる建物の記載が見える。しかし、今回検出した遺構がこの「湯屋」あるいは「浴室屋敷」なる建物に関連するか否かは、一応の可能性はあるものの保留しておきたい。観音堂についても、古絵図では現在の高野山大学学生寮付近にその記載がある。明治21年の古絵図ではこの地にすでに記載はなく、現在の地に移転されたものと推察される。

遺物から見た場合、近世の陶磁器類がその大半を占めるが、江戸時代と考えられる埋め土には中世の遺物も認められる。このことから、かつては今回検出した江戸期の遺構より遡る遺構が存在した蓋然性は高い。今後の周辺の調査に期待されよう。

参考文献

- （財）和歌山県文化財センター『金剛峯寺遺跡』1990年3月
- （財）和歌山県文化財センター『金剛峯寺遺跡』1991年3月



調査地点と観音堂



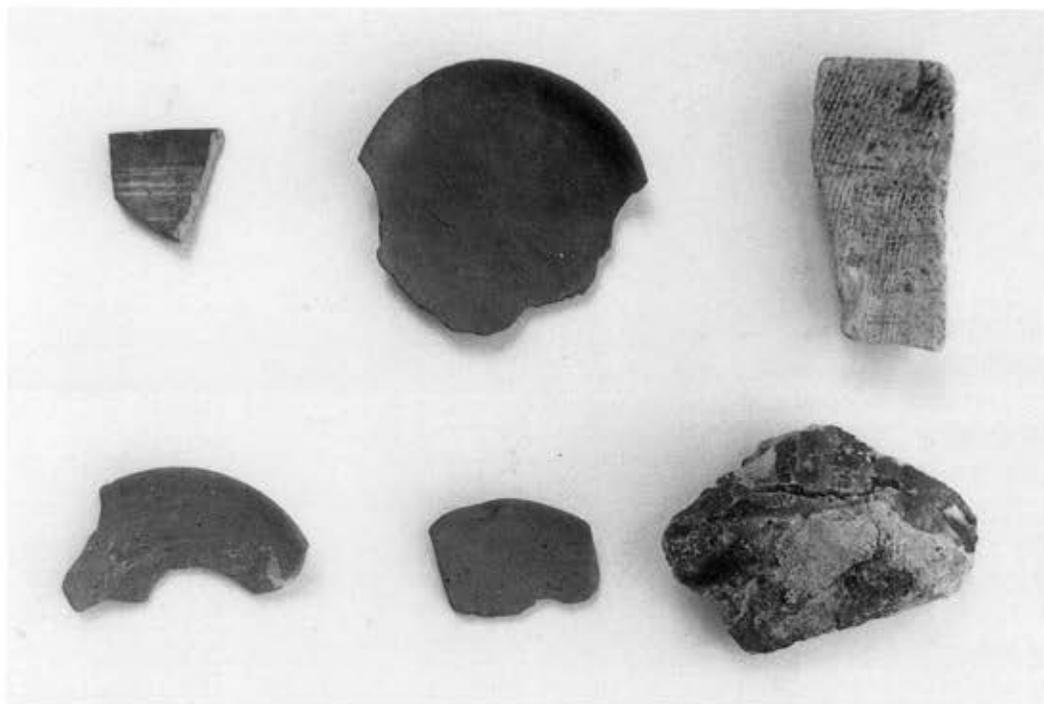
調査区全景



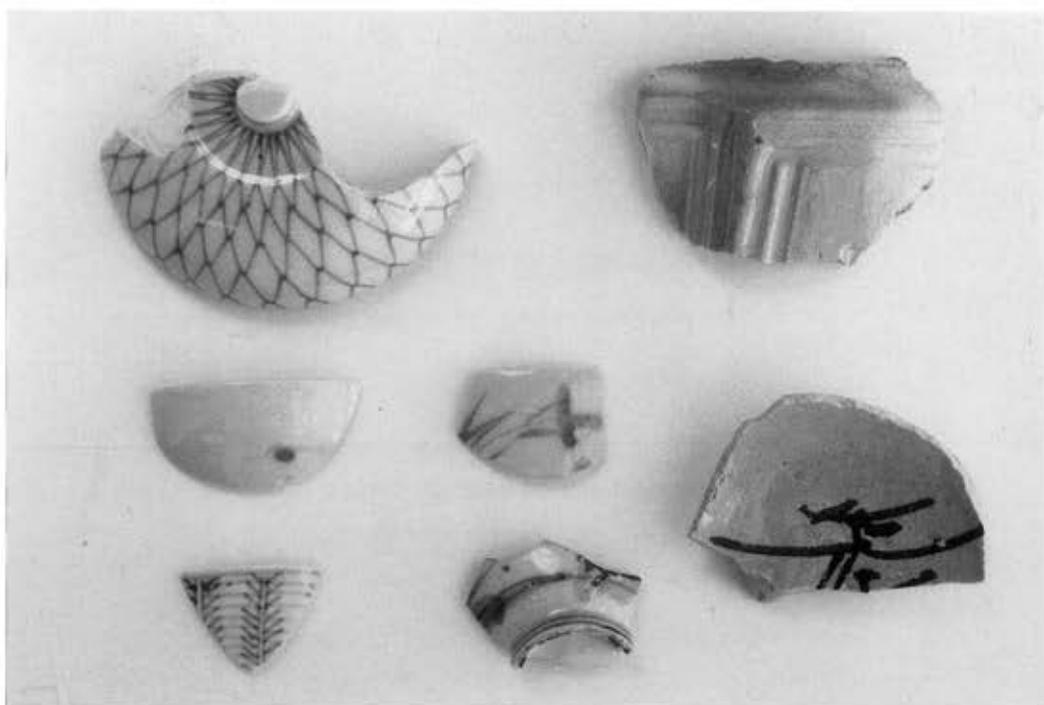
水利施設



木組樹



出土遺物（中世）



出土遺物（近世）

金剛峯寺遺跡発掘調査概報

—高野山文化財防災施設貯水層新設工事に伴う発掘調査—

1992年9月

発行 財団 和歌山県文化財センター
法人
〒640 和歌山市広道20番地 第2田中ビル

印刷 中央印刷株式会社
〒640 和歌山市梶取17-2